

アンボン 2011 年 9 月 11 日暴動に関する覚書

河野 佳春*

A note about the '9.11 riot' at Ambon.

Yoshiharu Kawano*

Abstract

In this note I have made a description about the '9.11 riot' at Ambon, based on articles of newspapers and my fieldwork. At the first half of 2011 inhabitants of Ambon believed that the conflict had completely finished. But at 11 Sept. 2011 so-called 9.11riot happened, the people had lost their belief. At that day they were confused by rumors, and suspected each other. Some few of them attack each other, accordingly 7 victims dead. I believe that a few provocateurs provoked inhabitant's indignation each other. They used SNS to spread false rumors. In the other side, there are 'the peace provocateurs' who use SNS, too. They spread true information against false rumors. The '9.11 riot' exposures trauma of the people from the conflict and mutual distrust between Muslim and Christian, but in other side new peace keepers emergent. So-called the peace provocateurs have been making a new method for peacekeeping in the confusion of 9.11 riot'. I think that they are the fruits of the peace movement for finishing the religious conflict from 1999 to 2002.



上左右と下左 2011 年 9 月 11 日放火された焼け跡。



下右バトゥメラ地区内に放置されている 1999 年紛争の焼け跡



* 総合教育科

1. 序

1.1 本稿の目的

本稿は、2007年本紀要19号所収の拙稿「最近のアンボン情勢についての覚書」のいわば続編である。⁽¹⁾そこでは、2002年2月から2006年9月までのアンボン地域情勢を概観したので、ここではそれ以降2012年9月までを扱うが、中でも2011年9月11日に発生した、いわゆるアンボン9.11暴動前後の事情を中心とする。

以下ここではまず、9.11暴動の背景として、当該地域の歴史や暴動の前史とも言える「宗教紛争」について、さらに同時期にしかし一見別個に展開している、村落紛争について説明する。

1.2 アンボン

一般にアンボンと言っても、その範囲は場合によって異なり、共通の範囲は設定できないが、筆者はひとまず、インドネシア共和国マルク州のアンボン島とルアシ諸島およびセラム島西南部沿岸一帯をアンボン地域と呼び、分析対象としている。

インドネシアにおいて、またインドネシア研究者の間でも、アンボンはキリスト教地域という印象が強いが、実際にはキリスト教徒は人口の半数をやや越える程度で、残りのほとんどはムスリムで、両者の比率は拮抗している。またスラウェシやジャワなど地域外からの出稼ぎ移民も多く、近年その中でもムスリムの比率が一層高まっており、彼らも含めれば、キリスト教徒とムスリムの比率は一層均衡していると思われる。⁽²⁾

歴史的には、16世紀香料貿易の発展によって人口が増加し国家形成が始まったが、1605年以降オランダにより次第に植民地化され、19世紀末までオランダによる香料独占貿易が行われた。その後オランダの帝国主義化に伴い、多くのキリスト教徒住民が、インドネシア地域を軍事的に支配する植民地軍の兵士となり、親オランダ的地域と看做されることとなる。1910年代後半から、都市部とムスリム村落を中心に民族政党が組織されたが、キリスト教徒中心の親オランダ地域というイメージは変わらなかった。⁽³⁾

第二次大戦中の日本海軍占領統治を経て、独立戦争期から、元植民地軍兵士を中心としてインドネシア民族主義に反対する運動が活発化し、独立後には南マルク共和国独立を目指す武力蜂起に至った。⁽⁴⁾

経済的には、公務員や船員など域外フォーマルセクターに多くの労働力を供給する他、マルク海域での漁業・水産加工業・流通の中心である。村落では

クローブ・ナツメグ・メース・ココヤシといった果樹栽培と沿岸漁業が、経済活動の中心である。これら村落における農漁業とその産物流通は、世界経済やインドネシア経済のレヴェルでは小規模で取るに足りないが、地域住民の生活において重要であることは留意すべきである。⁽⁵⁾

1.3 スハルト体制崩壊と地域紛争

アンボン地域において、近年最も大きな出来事は1999年から2002年まで多大な犠牲を出した地域紛争である。地域情勢は2002年2月マリノ2合意以降ゆっくりと沈静化が進み、2010年頃には地域の安定について、多くの人々が確信を持つに至っていた。⁽⁶⁾ところが、2011年9月11日の暴動発生をきっかけに、域内のキリスト教徒とムスリムの間の緊張が再び高まり、紛争終結の自信は大きく揺らいだ。

1999年以來の当該地域における「宗教紛争」については、インドネシア国軍の一部による謀略が主因との嫌疑が濃い。1997年通貨危機深刻化を背景に高まった民主化運動により、1998年スハルト大統領が辞任し、副大統領ハビビが大統領となったものの、さらなる民主化進行が長期的に軍の権益を脅かすことが明白であった。⁽⁷⁾

そのような情勢の中で、1998年年末ジャカルタなどジャワ各地でキリスト教会およびキリスト教徒を迫害する事件が相次ぎ、ジャカルタのギャングを含む多くのアンボン人が帰郷し、1999年1月19日のマルディカ市場での喧嘩事件をきっかけに一気にキリスト教徒とムスリムの衝突が爆発的に広がった。⁽⁸⁾

現在から振り返ってみても、アンボンでの「宗教紛争」勃発はあまりにも些細なきっかけから、あまりに急激に拡大している点で不自然であり、その上紛争拡大過程において、様々な流言飛語が飛び交いこれが火に油を注ぐ形になったことから、民主化から人々の関心を逸らすための謀略を疑わざるをえない。⁽⁹⁾

2011年の9.11暴動に於いても、暴動のきっかけとなった事故の処理に不自然な点があり、さらにデマによる扇動も激しく、当事者からは、1999年と2011年の状況の類似が指摘されている。⁽¹⁰⁾

前述のアンボンがキリスト教地域であるという誤解も、「宗教紛争」の発生・過激化に利用された。少数派であるムスリムが、多数派キリスト教徒によって迫害されているという図式は、ジャワなどのムスリム多数派地域で、アンボンへの「聖戦」扇動に盛んに利用された。⁽¹¹⁾

1.4 村落紛争

一方本論の扱う 2006 年以降の数年間、アンボン市を中心とした地域社会における「宗教紛争」の終息あるいは再燃と同時に、当該地域の多くの村落において、「宗教紛争」とは全く別の村落間紛争や村落内紛争が展開していた。(12)

これらは同じ宗教を信じる近隣村落間ないし、一つの村落の住民同士の間、村落首長などの役職や土地利用権などをめぐって発生している。その被害規模はかつての「宗教紛争」にくらべれば小さいが、銃や爆弾を使う衝突を繰り返す場合もあり、同時期の宗教対立による被害に比べるなら、けして小さいとは言えない。(13)

2. 2011年9.11暴動以前

2.1 紛争終結の確信

本論の扱う時期の初めには、紛争が終結したと確信する人はまだ少なかった。2004 年 4 月以降重大な衝突は発生せず、市内でも域内でも新しい建物の建設が続いていたが、ムスリムとキリスト教徒とのわだかまりは見た目には明らかであった。(14)

筆者がはじめてアンボンを訪れた、2008 年 3 月には、キリスト教徒のタクシー運転手やガイドは、ムスリム地域に行くことを嫌がり、外国人旅行者がそこへ向かうのも止めるように説得するほどであった。ムスリムとキリスト教徒の場合、隣接する村人同士の間にも、互いに強い警戒感があり打ち解けることは難しく見えた。(15)

しかし状況は次第に変化し、2011 年には 1999 年以降の紛争が完全に終結したとする見方が広まり、人々は地域情勢の安定に自信を持ち始めていた。

2.2 2011年3月7日リアン事件

そのことは例えば、2011 年 3 月 7 日のアンボン島東部のムスリム村落、リアン村での事件の顛末に典型的に示されている。同日夕方、同村内でバイクに乗った二人組によるひったくり事件が発生、犯人二人を村人が捕まえ殺してしまった。(16)

殺された二人は、同村に近いキリスト教徒村落パソの住民、ムスリム対キリスト教徒、リアン村対パソ村の紛争への発展が懸念された。しかし、問題はそれ以上拡大せず、パソ村からもキリスト教徒からも復讐の声は上らず、リアン村・ムスリム側からもそれ以上の攻撃は行われなかった。

かつての「宗教紛争」では、根も葉もない噂に基づいて、キリスト教徒村落とムスリム村落とが、互いに襲撃を繰り返した。しかし今回はそのような問

題は起こらず、地元新聞各紙編集部で話を聞いたが、記者らは異口同音に何ら問題にはならないと断言した。(17)

2.3 出稼ぎ移民の増加

地域情勢安定の確信は、地域住民の間でのみならず、地域外にも広がっていた。紛争以前アンボンには、マルク諸島各地からと、スラウェシなど域外から多数の出稼ぎ移民が居住した。紛争で発生した難民の多くは彼らであったが、紛争が終息にむかっても、なかなか域外からの出稼ぎ移民は回復しなかった。(18)

しかし、2011 年にはスラウェシやジャワからの出稼ぎ移民が著しく回復した。アンボン市内の地価が高騰し、ムスリム地区が過密化して新たなムスリム地区が拡大し、出稼ぎ労働者の多いバイクタクシーが増加し過当競争となった。(19)

3. 2011年9.11暴動

3.1 暴動のきっかけ

9.11 暴動は、その前日 2011 年 9 月 10 日の交通事故に関わる疑惑をきっかけ発生した。市内中心に近いマンガ・ドゥア地区に住む、ムスリムのバイクタクシー運転手が山間部のキリスト教徒村落で事故死した。ところが、遺体には暴行されたような損傷があったという。(20)

実際に事故だったのかはともかく、遺族をはじめマンガ・ドゥア地区を中心に多くのムスリムが、キリスト教徒住民や警察が、暴行死を隠蔽し事故死と偽っていると信じ、あるいは疑ったことはまちがいない。このような疑惑が広がる理由は、インドネシアの多くの地域で、村落が伝統的自治を維持しており、村落内での事故事件を自治的に処理するという事情がある。その上で、都市から遠い村落で、他所者が事故を起こすと私刑に合うという話は、まことしやかに広く流布している。前述したリアン村の事例は、そのような「伝説」を立証しているとも言える。(21)

しかし最大の問題は、人々を納得させるような説明が、公式にはなされずじまいとなったことであろう。一部報道も疑惑を取り上げ、当局に説明を求めたにも拘らず、当局の発表は、調査を行うとか、暴行は事実無根であるとかの声明のみだった。(22)

とはいえ、当局が疑惑について具体的明確に説明しなかったことは、この状況において理解できないことではない。まず、当局の発表どおり事故であったと仮定すると、誤解を解くためには詳しい検死結果の公表と、事故現場および検証結果の公表が必要

であろう。検死結果発表は写真などの証拠無しには意味を成さないが、無残な遺体の写真を公開すれば、却って人々の怒りに火をつける結果にもなりかねない。また現場の公表は暴行死を信じる人々に、犯人を名指しする結果となりかねない。

一方、かりに事件が事故でなく暴行死であったなら、やはり事実関係の公表と、それが妥当ならば容疑者の処分を発表する必要がある。しかし、リアン事件が示すように、当該地域で村落が自治的制裁を行うことは、それほど異常なことでないならば、暴行にそれ相応の理由があればさほど厳しい処分は下し難い。リアン事件の場合、犠牲者が常習的犯罪者として有名だったが、この場合はそういう事情もないようである。このような事情において、村落での私的制裁とその処分を発表することは、当事者のどちら側からも納得を得がたく、マンガ・ドゥア地区ムスリム住民と特定キリスト教徒村落との間に紛争を発生させ兼ねない。

このように警察当局が、暴行死疑惑に対して効果的に説明が行えない事情はあるていど推測できる。しかし、この推測が妥当であるなら、そのことはこの地域におけるムスリムとキリスト教徒との対立がそれだけ深刻であることを示しているといえよう。

3.2 暴動と 2011 年 9 月

9 月 11 日マンガ・ドゥア地区周辺で始まったムスリム住民とキリスト教徒住民の衝突は、商業地区であるマルディカ地区・バトゥメラ地区に拡大した。深夜までには状況は警察によって沈静化されたが、銃撃や投石によって 7 名が死亡、24 名が重傷、65 名が軽傷を負った。またマルディカ地区アマンホテル近くでは、放火により住宅多数が焼失した。⁽²³⁾

12 日以降市内で衝突はなかったが、官公庁や学校は休業し、少なくとも 4000 名が郊外や市外に避難生活を強いられた。市内各地で月末まで、情勢不安定化を狙った爆弾事件などが続いた。日を迫って整理すると、以下の通り。23 日夕方マルディカ地区アマンホテル近くで、漏電らしき小火災が発生し、一時付近はパニック状態となった。一方 23 日から、24 日午後 8 時ごろから何かが起こるとの風聞が広まった。その 24 日深夜市内高級住宅地区カランパンジャンと商業地区マルディカで、バイクから爆弾あるいは爆弾のような不審物を路上に投げる事件が発生した。さらに 26 日には、午前 8 時頃パティムラ広場南側（マルクキリスト教会教区会議事務所向かい）歩道にパイプ爆弾らしき不審物が発見され、昼にはマルディカ地区トゥルカベッシー通ホテルヨシバ前付近の路上で、爆弾らしき不審物が発見され、午後 8

時半過ぎ、再びカランパンジャン地区で走行するバイクから爆弾二つを投げる事件が発生し、その一つは教会入り口前で爆発した。⁽²⁴⁾

3.3 扇動と平和宣伝

9 月 10 日問題の事故以降、アンボン市とその周辺では盛んに紛争を煽るような風聞が広まった。「教会が焼かれた」「モスクが襲われた」というような内容だったが、メールやソーシャルネットワークなどインターネットが大きな役割を果たした点で、これ以前とは状況が異なった。⁽²⁵⁾

その一方でこのような流言飛語に対抗して、襲われたとされる教会やモスクなどの無事を、写真・動画などを添付して、インターネットで広める、平和宣伝者グループが活躍した。彼らはムスリム・プロテスタント・カトリック混交の自然発生的なグループで、コアメンバーは約 10 名、情報を拡散してくれるシンパが 50 名前後、年齢は 10 代後半から 40 代、職業も高校生、バイクタクシードライヴァー、宗教家、非政府組織メンバーなど様々である。⁽²⁶⁾

彼ら平和宣伝者グループの活躍が、近年の携帯電話やインターネットおよび SNS の普及によってはじめて可能となったことはまちがいない。しかしそれだけではなく、かつて「宗教紛争」終息にむけ行われた平和運動が、9.11 暴動という新たな危機に直面して、大きな成果をあげたということでもある。

最年長のメンバーでグループのリーダー的存在のジャッキー・マヌプティ牧師は、「宗教紛争」終結のために 2002 年 2 月に成立した、マリノ 2 合意の内容と精神を地域内に宣伝する活動の中心メンバーの一人だった。

マヌプティ牧師はカトリックの神父や修道女、イスラム指導者や地域社会指導者たちとともに、イスラム・プロテスタント・カトリック混合の宣伝隊を組み、地域内の村落を巡回した。その際に、それぞれの村の宗教に応じて先頭に立つ人間は交代したが、どこの村でもメンバー全員が参加して住民と対話したのである。⁽²⁷⁾

マヌプティ氏らのこのような活動はかつての紛争終結に大いに貢献したとされるが、今回の平和宣伝者グループの成立にも大いに寄与したと筆者は考える。宗教職業ばらばらの若者中心の宣伝者たちは、マヌプティ氏の事務所に集まって、協力してデマ否定のため、情報の収集宣伝活動をおこなった。彼のかつての宣伝活動が、思想的な面のみでなく、人脈的な面で成果を挙げたと言えるであろう。

3.4 9.11 暴動の衝撃

アンボン 2011 年 9 月 11 日暴動に関する覚書（河野）

9.11 暴動は、地域社会に強い衝撃を与えた。暴動直前の 2011 年 9 月初旬、地域住民は地元出身者も出稼ぎ労働者も、ムスリムもキリスト教徒も「宗教紛争」は完全に終わったと思っていた。その自信がたんなる思い込みであったことを、人々は否応なく思い知らされた。

かりになんらかの謀略があったとしても、いとも簡単に暴動が引き起こされ、互いに投石や銃撃を行って死傷者を出し、住宅地を焼いたことで、この社会が今も宗教対立の火種を抱えており、そこを狙った謀略にはきわめて脆弱であることが明らかになった。

他方、暴動が一日で収まり長期化しなかったこと、市内でも一部の地域に限定されて、市街地全体や市外に拡大しなかったことは、不幸中の幸いであり、多くの地域住民が「宗教紛争」から教訓を学び、冷静に行動できたことを示している。なかでもいち早く平和宣伝者となつて、デマ否定の情報活動を展開した人々の存在は驚異的である。

4. 2011年10月以降

4.1 継続する扇動

9.11 暴動において計画的な扇動、すなわち謀略があったのかどうかはわからないが、前述の通り暴動後、9月23日ごろ以降には謀略が行われたと見て間違いない。

爆弾らしきものをばらまく手法は、9月26日で一段落したが、攪乱工作ないし宗教対立刺激工作らしき動きは、その後も断続的に続いている。関係する事象を順に整理すると、以下の様になる。

2011 年 10 月

2 日、警察がアンボン市街地内の全教会とその他重要地点に警備詰所を設置し、警官を配置。⁽²⁸⁾

4 日、暴動以来続いていた、ムスリムとキリスト教徒とを別々に通行させるための、市街地内の臨時交通規制が解除、交通が通常に復帰。⁽²⁹⁾

20 日、市内中心部バトゥ・ガジャ地区で、3 時頃バイクに乗った二人が商店など二ヶ所で投石、これに刺激されて住民同士が衝突、3 名が矢で負傷、店舗 2 棟住宅 1 棟が放火され、発砲もあった。⁽³⁰⁾

23 時 45 分頃、市内バトゥメラ地区トゥルカベッシー通りで爆竹を使った小爆発があり、ヤマハミオ（バイク）に乗った犯人が目撃。直前 2 3 時頃、警察は拳銃と 38 口径銃弾十発を所持する男を逮捕。⁽³¹⁾

11 月

8 日、警察がアンボン島ワエヘル地区でキリスト教徒とムスリムの間に対立を扇動した犯人を逮捕。⁽³²⁾

18 日、市街地中心部での事故に関してデマが流れ、ムスリムとキリスト教徒の間に緊張状態。翌日にはデマと確認され、平穏にもどった。⁽³³⁾

19 日、21 時ごろ市街地中心部整体ナカムラ前路上で爆発事件発生。⁽³⁴⁾

21 日、3 時頃高級住宅街カランパンジャンで爆発事件。⁽³⁵⁾

24 日、警察が自家製パイプ爆弾所持の容疑者を逮捕、一連のばらまき事件爆弾に類似、市内商業地区マルディカ居住の 29 歳男性。⁽³⁶⁾

12 月

15 日、キリスト教徒住民が、警察での抗議行動から帰還中に、ムスリム住民と衝突、負傷 4 名車両 3 台破壊。⁽³⁷⁾

2012 年 6 月

25 日、早朝マルディカ地区で爆発人的被害なし。⁽³⁸⁾

9 月

6 日、ジャカルタで爆弾密造武器不法所持のテロ容疑者逮捕、アンボン行きを計画。⁽³⁹⁾

9 日、市内バトゥ・メラ地区グヌン・マリントンとクブン・チェンケで、6 名のテロ容疑者を逮捕、いずれも域外からの出稼ぎ移住者。⁽⁴⁰⁾

13 日、マルク州アンボンで逮捕の 6 容疑者関係で、同州トゥアル市内在住の容疑者逮捕。2008 年 11 月インド・ムンバイテロのパキスタン e-Thaiba 義勇軍で訓練を受けた人物。⁽⁴¹⁾

2011 年 10 月以降 2012 年 9 月末現在までの 1 年間に、実際にムスリムとキリスト教徒とが衝突した事件は、管見の限り 10 月 20 日と 12 月 15 日の 2 回だけである。しかし、この間爆発事件が 4 回発生し、爆発物所持で、アンボン市内で 2 件 7 名、州内 1 名ジャカルタで 1 名、他に市内で 1 名が銃の不法所持で島内で 1 名が扇動で、それぞれ逮捕されている。扇動での逮捕は 1 名だが、この間デマによる扇動緊張が二回報道された。⁽⁴²⁾

このような扇動が、どの程度あるいはどのように組織されているかは不明だが、アンボン地域外のムスリム過激派が多く関わっており、中には国際テロ組織につながるケースもある。アンボンに再び「宗教紛争」を引き起こそうとした、と供述する容疑者もいる。⁽⁴³⁾したがって、これらの扇動は、インドネシア全体の政治情勢や国際情勢のなかで総合的に分析する必要があるが、ここではひとまず、地域外からの干渉、攪乱工作と仮定しておきたい。

なお、このような爆弾事件など攪乱工作は、9.11 暴動後に新たに始まったわけではない。暴動前の 2011 年前半で筆者の知る限りで、同様の事件は 2 件

発生している。(44)したがって、9.11 を境に、注目が集まり大きく報道されるようになったのか、あるいはこれら工作をおこなう勢力が、機会主義的にアンボンで活動を活発化しているとみなすべきであろう。

4.2 平和維持の努力

もちろん、このような扇動に対抗する平和運動も同時に展開した。先述の平和宣伝者たち以外に、この時期異宗教混合の青年平和運動団体「コーヒー奉仕団」が結成され、平和集会や宗教の垣根を越えた社会奉仕活動を展開した。(45)

また、2002 年のマリノ 2 合意以来、伝統的な村落間同盟ペラが、行政やコミュニティによって平和維持の基盤として宣伝強化されてきた。この時期にも、2011 年 10 月 4 日には村の伝統的ペラの確認儀礼が盛大に催された。(46)

さらに 2012 年 3 月 12 日には、島南部のキリスト教村落エマと、アンボン市街地内のムスリム地区バトゥメラとのペラガンドン（慣習伝統による村落間同盟）が新たに結ばれた。(47)

5. 結

9.11 暴動を境にアンボン地域情勢は大きく変化した。しかし、その変化は地域情勢の根本的变化と言うよりも、地域社会にもともと存在していた、ムスリムとキリスト教徒との相互不信や敵意の表面化や、アンボンにおける「宗教対立」に社会的に関心が集まったことによる報道の変化、さらには当該地域の社会不安に付け込もうとするテロ活動の活発化などである。つまり 9.11 暴動は、以前から存在した地域内矛盾や、インドネシア国内でアンボンの置かれたスケープゴートの立場を、再度表面化したのである。

こうした状況の中で、平和宣伝者たち、コーヒー奉仕団そしてペラの強化拡大に取り組むコミュニティや行政関係者などによる、宗教の境を越えた平和維持の試みは、外部からの攪乱工作を完全に抑え込むことはできないまでも、一定の成果を挙げていると評価すべきであろう。

しかし、現在アンボン地域内では、序に述べたように 9.11 暴動と無関係に見える村落紛争が多数展開しており、アンボン市街地でも宗教対立とは別に地元出身者と新来者の対立がはげしい。(48)また 2002 年までの「宗教紛争」のために、いまだに難民生活を強いられている人々も決して少なくない。(49)

したがって、アンボン地域社会の前途は多難であり、インドネシア政府・警察当局による、いわゆる

テロリストに対する、厳しい取り締まりが求められる。そして同時に、かつての「宗教紛争」のように、軍や警察・政府などが、アンボンにスケープゴートにすることを二度とないことを希望する。

注

(1) 河野佳春「最近のアンボン情勢についての覚書」『弓削商船高等専門学校紀要』第 29 号 2007 年。

(2) 『新版東南アジアを知る事典』平凡社 2008 年、30 ページ。および、桑野淳一『インドネシア印尼放浪』連合出版 1997 年、187～193 ページ。

(3) 同上、同 (2)、434～435 ページ。

(4) Chauvel, R., *Nationalists, Soldiers and Separatists The Ambonese Islands From Colonialism to Revolt 1880-1950*, KITLV Press, Leiden, 1990.

(5) 京都大学東南アジア研究センター編『事典東南アジア 風土・生態・環境』弘文堂 1997 年、357、362～363 ページ。

(6) 筆者による現地調査、2008 年 3 月、2008 年 12 月～2009 年 1 月、2009 年 7～8 月、2010 年 3 月、2010 年 9～10 月、2011 年 3 月、2011 年 9～10 月、2012 年 3～4 月。

(7) Human Right Watch *The violence in Ambon*, 1999,

<http://www.hrw.org/news/1999/03/16/indonesia-violence-ambon>

(8) 小松前掲書、18～19、21～26 ページ。

(9) 小松前掲書、21、25 ページ。

(10) ジャッキー・マヌプティ (Jacky Manuputti) 牧師へのインタビュー、2011 年 10 月 8 日

(11) 小松前掲書、35～38 ページ。および、桑野前出。

(12) *The Jakarta Post*, 13 Apr. 2002, and *Suara Maluku*, 2, 5, 8 Dec. 2011, 9, 10, 12, 13, 16 Mar. 2012

(13) 例えば 2012 年 2 月 11 日に発生した、ハルク島ブラウ村での、サランベッシー氏族内の衝突では、6 名が死亡し、住宅 300 棟が焼失、3000 名以上が一時村外へ避難した。これについては以下参照。*Jakarta Globe*, 12 Feb. 2012, and *Kompas*, 10, 12, 14 Feb. 2012, and *Tempo interactive*, 17 Feb. 2012, and *Ambon ekspres*, 14, 15, 16, 17 Feb. 2012.

(14) 同(6)

(15) 同上、特に 2008 年 3 月。

(16) *Suara Maluku*, 8 Mar. 2011, and *Siwalima*, 8

アンボン 2011 年 9 月 11 日暴動に関する覚書 (河野)

Mar. 2011.

(17) 2011 年 3 月 8 日インタビューした編集部は以下の各紙。 *Ambon Ekspres*, *Suara Maluku*, *Radar Ambon*, *Siwalima*.

(18) 同 (6)。

(19) 同上、特に 2011 年 9~10 月、*The Jakarta post*, 1 Jul. 2011.

(20) *Kompas*, 11 Sept. 2011.

(21) 同(6)。

(22) 当局に事故の詳しい情報公開求めたのは、*Kompas*, 14 Sept. 2011.。これに対して、新聞等で知る限り明確な発表はなかった。また、筆者は 2011 年 9 月 24 日から 10 月 8 日まで、アンボンに滞在したが、現地でも十分な情報は得られなかった。

(23) *The Jakarta post*, 13 Sept. 2011., and *Media Indonesia.com*, 12 Sept. 2011. : http://www.mediaindonesia.com/read/2011/09/09/258500/290/101/_BentrokAntarwargaDiAmbonMeluas#.Tml4kYgo0ZU.twitter

(24) (22)に述べたように、筆者はアンボン滞在中であった。

The Jakarta post, 14 Sept. 2011., and *Kompas*, 26 Sept. 2011., and *Suara Pembaruan*, 26 Sept. 2011., http://www.suarapembaruan.com/home/kota-ambon-diteror-paket-bom/11649#.ToA_mlvw55I.twitter

(25) *The Jakarta globe*, 13 Sept. 2011.

(26) 同(10)。

(27) 同上および Tanenbaum Center for Interreligious Understanding, Reverend Jacklevyn “Jacky” Frits Manuputty, Indonesia, <https://www.tanenbaum.org/programs/peace/peacemaker-awardees/reverend-jacklevyn-%E2%80%9CJacky%E2%80%9D-frits-manuputty-indonesia>

(28) 同 (6)、および *The Jakarta globe*, 2 Oct. 2011.

(29) 同 (6)。

(30) *Kompas*, 20 Oct. 2011. and *The Jakarta globe*, 20 Oct. 2011.

(31) *Vivanews*, 20 Oct. 2011., <http://us.nasional.news.viva.co.id/news/read/257528-bom-meledak-di-ambon--tidak-ada-korban-luka> and <http://us.nasional.news.viva.co.id/news/read/257580-pelaku-rusuh-ambon-ditangkap-depan-karaoke> and *Ambon ekspres*, 22 Oct. 2011.

(32) *Ambon ekspres*, 9 Nov. 2011.

(33) *Liputan.com*, 19 Nov. 2011., <http://news.liputan6.com/read/363720/situasi-ambon-kembali-kondusif>

(34) *Vivanews.com*, 19 Nov. 2011., <http://us.nasional.news.viva.co.id/news/read/265733-ledakan-diduga-bom-terjadi-di-ambon>

(35) *The Jakarta globe*, 21 Nov. 2011.

(36) *Kompas*, 24 Nov. 2011.

(37) *Kompas*, 15 Dec. 2011.

(38) *Kompas*, 25 Jun. 2012.

(39) *Kompas*, 6 Sept. 2012.

(40) *Kompas*, 10 Sept. 2012.

(41) *jpnn.com*, 14 Sept. 2012., <http://www.jpnn.com/berita.detail-139756>

(42) 同(32)(33)。

(43) 同(39)(41)。 and *MetroNews*, 6 Sept. 2012.

(44) *MediaIndonesia.com*, 31 Aug. 2011

(45) *Antara News*, 21 Jan. 2012.

(46) *Suara Maluku*, 4 Oct. 2011, and *Kompas*, 4 Oct. 2011.

(47) *Kompas*, 15 Mar. 2012.

(48) *khbarsoutheastasia.com*, 25 Jul. 2012, http://khbarsoutheastasia.com/en_GB/articles/apwi/articles/features/2012/07/25/feature-03